法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

ピーコ・デッラ・ミランドラにおける「人間 の尊厳」の問題について

大貫, 義久

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
86
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
91
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005953

71

ピーコ・デッラ・ミランドラにおける

「人間の尊厳」の問題について

大 貫 義 久

はじめに

惨な状況ばかりが目につき、そしてそりいった状況ばかりがことさらに強調されている現代、危機の時代と呼ばれ て久しいこの現代において、「人間の尊厳」とは、いったい何を意味するのであろうか。 八間の歴史を振り返ったとき、「人間の尊厳」というテーマを、初めて、まとまった形で、それもかなりはっき 「人間の尊厳」という言葉ほど、現代を生きるわれわれの心に強く響く言葉はないであろう。 もっぱら人間 の悲

書くと約束しているが、その約束は果たされなかった)。 ティウス三世)の『世界の蔑視について、あるいは人間の状態の悲惨について』は有名である(ロタリオの著作に このテーマを「人間の悲惨」という テーマと 対にして書く方法が 確立されていた。カンタベリーの ヘルメルスの ついては、彼自身が、この序文の中で、将来において、この著作と対の関係になる「人間の尊厳」に関する論文を りと意識して取り扱った時代が見えてくる。その時代こそ、言うまでもなくルネサンスである。 『人間の状態の尊厳と悲惨についての省察』や、そして特に助祭ロタリオ・ディ・コンティ(後の教皇レンノケン 確かに、ルネサンス以前の中世から、「人間の尊厳」というテーマはすでにあった。一二世紀の終わりまでには、

年。今後はピーコと略す)であったのである。 代において、すべての思想家ではなく何人かの思想家が、特に「人間の尊厳」についてまとまった形で、しかもは 張する思想家が存在した、ということを思い浮かべればよいだろう。だから、正確に言えば、ルネサンスという時 ネサンス期においてさえ、他方では モンテーニュ のような、「人間の尊厳」をよりも、むしろ「人間の悲惨」を主 であって、現実の場においては、どちらを強調するかという、単なる「強調の移動」にすぎない。この点について のではなく、むしろ相補的なものであるから。それゆえ、マネッティの「人間の尊厳」の肯定は理屈の上でのもの なぜなら、この現実の場においては、われわれがしばしば直面するように、これら二つの概念は互いに対立するも 尊厳」を現実の場において平行的に対立させ、人間の、悲惨を否定し、尊厳を肯定した人物が、ルネサンス人マネ えられたのである。こうして「人間の悲惨」と「人間の尊厳」は対概念でありながらも、魂の道行きの始めと終わ この世に執着する限り悲惨であるが、この世をさげすみ、あの世の神へと向から限りでは至福にいたりうる、 げすみ、心をもっぱら、あの世の神へと向け、神へと一致することで確立されるものであった。つまり、人間は、 われわれは、このマネッティのごとく「人間の尊厳」を髙らかに歌い上げること一色に染まっているかに見えるル りとして両方ともに肯定されて時間的に結ばれることになった。この結び目を切断し、「人間の悲惨」と「人間の っきりと意識して論じたのであり、その内の一人がジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ(一四六三~九四 ッティであった。マネッティがこれら二つのテーマを現実の場において平行的に対立させたことは注目に値する。 にその色調が異なっている。中世における「人間の尊厳」は、人生の悲惨を問題とすることによって、この世をさ ノンツォ・マネッティが『人間の尊厳、及び人間の生の優越について』(一四五二年)の中で語るものとは、 かし、この中世において取り上げられた「人間の尊厳」の内容は、ルネサンス期の代表的な人文主義者ジャン 明らか

ところで、ピーコは、この『演説』の他にも、『ジロラモ・ペニヴィエニによって 書かれた 愛の歌についての注 この小論では、ピーコの、ルネサンス期においても 特に有名な『人間の 尊厳についての 演説』へ一四八六年。 『演説』と略す)に焦点を絞り、ピーコにとっての「人間の尊厳」の意味について考察してい 4

とされる限りで触れるつもりである。 る。事実、これまで研究者により、『愛の歌についての注釈』、『演説』、『ヘプタプルス』の三著作につ い て、 できるかもしれない。しかし、その早すぎる死ゆえに思想が充分に体系化されず、著作間に思想上の混乱が見られ 才の若さでこの世を去った。ピーコの全著作数をわれわれが知るならば、三一才の生涯にしては多作と言うことが 部からなる物語』(一四八九年)、『存在と一者』(一四九一年)等を書き、そして『反占星術論』を選著として三一 釈』(一四八六年。今後は『愛の歌についての注釈』と略す)、『ヘプタプルス――「創世記」の 六日に ついての七 「人間及び宇宙における人間の位置」に関するピーコの見解の相違が指摘されてきた。このことについては、

たわれわれの問いに対して何らかの示唆をきっと与えてくれるにちがいない。と言われるほどの早熟の天才なのだから。この、一五世紀末の危機の時代を生きていたピーコならば、冒頭に置 著作の中に、ピーコのその後の思想的動向が集約されているのではないか、と考えるからである。ここで、二三才 の、しかも当時すでにヨーロッパ中にその名が轟いていたフィチーノに向かって、プロティノスの重要性を説 の指導者マルシリオ・フィチーノに会い、その才能を高く評価されたばかりでなく、なんと自分より三〇才も年上 の若さに驚いてはならない。このピーコは、すでに一六才のときに、初めてフィレンツェでプラトン・アカデミア 以上の点をふまえた上で、この小論があえて『演説』に焦点を絞るのは、二三才の若さで情熱的に鸖かれたこの

自身が単に「演説」と呼んでいた草稿は、彼の甥で、また弟子でもあるジャン・フランチェスコ・ピーコによって 題』は異端とされ、討論会は開かれず、そしてこの演説草稿もピーコの生前には公表されなかった。この、 めぐって一四八七年にローマでなされるはずであった公朋討論会の開会のための演説草稿であった。ところが『提 『演説』は、ピーコが一四八六年に執筆し、イタリア全土の学校に掲示されるよう配布した『九〇〇の提題』

74 うレッテルを貼られてしまった『演説』の内容を、テキストに則して見ていくことにしよう。 → それでは次に、この優雅で表現力にあふれる、そしてそれゆえに一部の研究者によって修辞学的な訓練の書とい 今日に至っている。この草稿で、「人間の尊厳」という テーマが 直接に取り扱われるのは、最初の、それも 十分の 集で初めて『人間の尊厳についての演説』という題名が付けられ、その後この題名が一般に通用するようになり、 一程度の部分であることを知れば、この部分がその後の人々に、いかに強く印象を与えたか、わかるであろう。 『あるきわめて優雅な演説』と題されて一四九六年にボローニャで公けにされ、そして一五五七年のバーゼ

ゆえに、ピーコのフィチーノ批判として注目に値する。 だが、第一義的なものではない」と言って、満足しないのである。特に四番目の主張はフィチーノのものであるが な」であるとか、団天使よりも少し劣っている者であるとか、する主張に対して ピーコは、「それらは 重要なもの 自然を解釈する者であるとか、曰「止まっている永劫」と「流れる時」の間に立つ者であるとか、四世界の「きず のものどもと親しい者であり、下位のものどもの王であるとか、口感覚の鋭さ、理性の探求力、英知の光によって にも自分が満足できないことを、ピーコは告白する。つまり、人間は、口もろもろの被造物の仲介者であり、上位 という言葉で表現される「人間の本性の卓越性」について、これまで思想家等によって主張されてきた教説のどれ ほど驚嘆すべきものはない」という言葉や、ヘルメス・トリスメギストスの「偉大なる奇跡とは人間のことである」 庁の聖職者たち、特に枢機卿団の人々への呼びかけで、この演説は始まる。そして、サラセン人アブダラの「人間 尊敬すべき神父の皆さん」という具合に、ローマでの討論会に列席してくれることをピーコが望んでいた教皇

たし、 しを用いながら展開していく。つまり、神は「隠れたる知恵の法」によって、超天界を造り、これを天使たちで飾り ーテル的な諸天球を造り、これを永遠の魂で生かし、そして下位の世界を造り、これをあらゆる種類の動物で満 それでは、ピーコが考える「人間の本性の卓越性」とは何か。その説明を彼は、 仕事を完了した。超天界が恒星球より上の領域を、エーテル的な諸天球が月の球より上の、 聖書的な神による世界創造 遊星の球の領域

フ

ーノは『プラトン的神学』の中で、この世界を、神(Deus)、天使(angelus)、霊魂(anima)、質(qualitas)、

そのものに世界の中央の場所を割り当て、こう話しかけた。」 それらの存在者のおのおのと共有するように定めた。それゆえ神は人間を不定な本性をもつ被造物として受取り、 (4) 従っている。そしてさらにピーコが言うに、神は仕事を完了したとき「かくも大いなる御業の意味を考え、その美 を、そして下位の世界が「汚れ、澱んでいる」と言われ月の球より下の領域を、それぞれ表している、 自身に固有なものを何一つ与えることができなかった被造物〔人間〕が様々な種類の存在者に固有なものすべてを べてのものがそれぞれ、最高位に、中間位に、そして最下位に割り当てられた。結局、最も優れた造り主は、それ さらに全世界の座席には、宇宙の観照者が座る場所はなかった。すべてのものはいま、 とのできるものはなかったし、また神の宝物殿の中にも、神が新しい息子に遺産として贈与するものはなかったし、 を愛し、その偉大さに感嘆する或るもの」が存在することを欲し、こうして人間の創造について思いめぐらした。 とが可能であるから、ピーコは、ここまでのところ、伝統的なアリストテレス的・プトレマイオス的な宇宙体系に 「しかし」――とピーコは続けて――「神の用いた原型の中には、神がそれを材料として新しい子孫を形作るこ 世界中に充満しており、す

ィチーノによって哲学的に深められた階層的な世界とそこにおける人間の位置についての(伝統的な)考え方とピ 古代ギリシア以来の、そしてルネサンス期ではフィチーノによって哲学的に深められた「人間を小宇宙とみなす」 て神は、最終的に世界(宇宙)の中央の場所を割り当てた、と言われていることである。第一のことについては、 て造られた、ということである。そして第二に、最初に階層的な宇宙のどこにも占める場所がなかった人間に対し 被造物のおのおのに固有なものすべてをそれらのおのおのと共有し、それゆえ人間は不定な本性をもつ被造物とし (伝統的な)人間観とピーコの人間観とのかかわりが、第二のことについては、スコラ哲学で確立され、やはりフ ここでは、二つのことに注目すべきである。まず第一に、人間には固有の本性はなく、むしろ人間は人間以外の コのそれについての考え方とのかかわりが、それぞれ問題になる。これら二つの問題を考察するために、ここで の思想を取り上げる。

が自然全体の「きずな」(copula)として質と物体を支配し、天使と神に結びついている、と主張した後で、この理 物体(corpus)という具合に五つの段階に分け、この段階で中位を占めている人間の理性的霊魂 (anima rationalis)

性的霊魂について、さらに具体的に次のように説明する。

と呼ばれうる。」 然の中心、ありとあらゆるものの中間者、世界の連鎖、すべてのものの顔、世界の結び目 (nodus) にして、きずな そしてそれはありとあらゆるものの真の連結であるゆえ、或るものの中に移ってゆきながら、他のものを放棄しな 或る仕方で産出する下位のものたちの理由や模範をそれ自身の中に所有している。そしてそれはすべてのものの中 いで、個々のものの中に移りゆきながら、しかもつねにそれら全部を保持している。したがってそれは正当に、自 心にあるので、すべてのものの力を所有している。もしそうだとするならば、それはすべてのものの中に転移する。 ある。その本質は、それ自身が依拠している神的なものの像をそれ自身の中に所有し、それがまたそれ自身により それぞれそれ自身において個々の或るひとつのものであるが、この〔理性的霊魂の〕本質は同時にすべてのもので 「それ〔理性的霊魂〕は自然の中の最大の奇跡である。実際、神の下にある残余の〔理性的霊魂以外の〕存在

ばならないだろう。なぜなら、その人間観は、いま見たように人間を世界の結び目とする見解と一つなのであるか には、人間を小宇宙とみなす伝統的な、そしてフィチーノによって哲学的に深められた人間観を彼は放棄しなけれ 解に不満の意を表明していたピーコは、フィチーノの思想にかわる新しいものを提示しなければならない。その際 る考え方とは、人間を世界の結び目とする考えによって密接に結びついている。この人間を世界の結び目とする見 中間に位置づけられている。明らかに、この人間を小宇宙とみなす人間観と、人間を階層的世界の中間に位置づけ とで人間を小宇宙とみなしている。そして、この理性的霊魂は「結び目」として五つの段階からなる階層的秩序の るものの中へと次々に移ってゆきながらも、他のものを放棄しないで、つねに全部を保持している」と主張するこ ここで フィチーノは、「人間の 理性的霊魂が、ありとあらゆるものの 真の連結ないし結び目であるがゆえに、 そしてまた、その人間観を放棄することは必然的に、階層的世界とそこにおける人間の位置についての伝統的

77

はアダムへこう話しかける。

れがすでに注目した二つの点について検討してみる。 な考え方を放棄することになる。果たしてピーコは、この人間観及び考え方を放棄しているのであろうか。

界の中央の場所を割り当てた」と主張する。 的な、やはりフィチーノによって哲学的に深められた考え方を放棄している、と。そしてピーコは「神は人間に世 界を見るという伝統的な態度を保持してはいるが、しかし他方で、その世界における人間の位置については、 た」と主張しているのであるから、われわれはこう言うことができよう。つまり、ピーコは、一方で、階層的に世 階層的世界とそこにおける 人間の位置については、ピーコが「階層的世界の どこにも 人間の占める場所は しろ「フィチーノによって哲学的に深められた」ところのその人間観を放棄したのである、と。また、二点目の、 われわれはこう言わなければならない。つまり、ピーコは、人間を小宇宙とみなす人間観それ自体をではなく、む ている」と主張するとき、明らかに彼は、人間を小宇宙とみなしている。だとすると、これまでの考察からして、 まず、ピーコが「人間は人間以外の被造物のおのおのに固有なものすべてをそれらの被造物のおのおのと共有し なかっ

における人間の位置に関する見解が互いに異なっているからである。しかし、少なくとも『演説』においては、伝ら、すでに述べられたように、『愛の歌についての注釈』、『演説』、『ヘプタプルス』の 三著作間 で、人間及び宇宙 説』とそれ以外の著作との関連から議論されてきた。この問題の解決は難しい、と言わなければならない。なぜな いて検討することである。この言葉こそ、 統的な考え方を放棄しようとする試みがなされている、とわれわれは言うことができよう。この小論では、この点 人間の発見」の最後を飾った言葉である。 これらの伝統的な考え方をピーコが最終的に放棄したのかどうか、という問題は、これまで研究者によって『演 われわれのさしあたっての仕事は、『演説』の中でも特に有名な、神による アダムへの 言葉につ かのブルクハルトが『イタリア・ルネサンスの文化』の第四章「世界と

ーアダムよ、 われわれは、定まった座も、 おまえだけのものである姿形も、 おまえ自身に固有の機能もおまえに与

の決心によって、より下位の獣的な生活の形態へと堕落することもできるだろうし、より上位の神的な生活の形態 の自由によって、そして名誉をもって、自分の選り好んだ形で自分自身を形作るためにである。おまえは、おまえ のとしても不死なるものとしても、造らなかったが、それは、おまえがおまえ自身の制作者・形成者として、 に見回すことができるためにである。われわれはおまえを、天上のものとしても地上のものとしても、死すべきも がおまえをその手中に置いたおまえの自由意志に従って、自分自身に対して自分の本性を決定すべきである。 えなかったが、それは、 われは、 われによって規定された法の範囲内に制限されている。おまえは、いかなる束縛によっても制限されず、われわれ 断とに従って、おまえがそれを手に入れ所有するためにである。他のすべてのものの本性は限定され、そしてわれ おまえを世界の中心に置いたが、それは、世界の中にあるすべてのものを、おまえがそこから、より容易 いかなる座、 いかなる姿形、いかなる機能をおまえが望んだとしても、 おまえの願いと判

へと生まれ変わることもできるだろう。」

神の像と似像にかたどって造られたことに存するが、それは、次の意味に解釈されうる。すなわち、 なものであるが、特にルネサンス期には「人間の尊厳」の根拠として強調された。つまり「人間の尊厳は、人間が れる「神の似像としての人間」という考え方は、人間を小宇宙とみなす先の考え方とともに、西欧において伝統的 地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ』」という 文章 である。ここに見ら 間に世界の中央の場所を割り当てた理由とが、述べられている。これら二つの理由を見て行く前に、ここではまず って人を造ろう』」という文章と、同章二八節の「神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、 いるからである。特に『創世記』第一章二六節 の「神は また言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたど 「神がアダムに語りかける」という形について考えてみたい。ピーコがこの形をとったのは、彼が聖裑を意識して 似像という限界を超えて、神の像と原型との完全な一致への発展を通じて上昇し、最後には神と化すことができ ここで、神がアダムに語りかけるという形で、神が人間に対して固有の本性を与えなかった理由と、 という〔超越的な〕意味に、あるいは、人間は神に似た仕方で、考え、感じ、そして行動しながら、人間より 人間は神の像 また神が人

とについては後に詳しく論じられるであろう。 れわれは、堕罪以後の人間に対して「神による恩寵の助け」が働く可能性及び必要性を引き出すのである。このこ け」を堕罪以前になされたものとして考えることが可能だということである。つまり、そう考えることによってわ 尊厳に関する考察の中に含まれていた、これら二つのモチーフを哲学的に及び体系的に統合したのは、 とを当然とみなして、何らかの論理的ないし体系的な調和化を図ろうとはしなかった。……しかしながら、人間の ン主義の復興であった」のである。またさらにここで考慮しておきたいことは、この「神によるアダムへの語りかい主義の復興であった」 七○年代から九○年代にかけてフィレンツェで興り、そこから広く波及した〔フィチーノやピーコによる〕プラト イタリア人文主義の運動は、人間の啓厳というテーマについてのこの伝統的な二つの解釈上の立場を並置させるこ も下位の世界を、支配し、利用し、指導し、そして再構成する、という〔内在的な〕意味に、解釈されうる。…… 一五世紀の

落することも、より上位の神のような生活の形態へと生まれ変わることもできる。このことをピーコは次のように またそうすべきなのである。それゆえ人間はまた、自分の決心によって、より下位の獣のような生活の形態へと堕 きるようにしたからである、と述べられている。人間は自分の自由意志に従って自分の本性を決定することができ、 えなかった理由は、人間が自分の願いと判断とによって、自分の望むいかなる本性をも手に入れ所有することがで さて、先に挙げた二つの理由に戻って、これについて考察してみよう。まず、神が人間に対して固有の本性を与

存在する神の孤独な閨の中で、万物を超えたものになるだろう。」 造物の状態にも満足せずに、自らの一性の中心へと引きこもるならば、その人の霊は神と一つになって万物の上に 子が植物的であるのなら、その人は植物のようになるだろう。もしそれが感覚的であるのなら、その人は獣のよう が育む種子はどんなものであれ、成長して、おのおのの人間の中にそれ自身の果実を産み出すだろう。 になるだろう。もし理性的であるのなら、その人は天使、ないしは神の子になるだろう。そしてもし、 「人間が生まれたとき、父なる神は、あらゆる種類の種子とあらゆる種類の生命の芽とを授けた。おのお いかなる被 のの

方は、人間が現実的な小宇宙になるということの具体性をなすもの、と言えよう。つまりそれは、人間が神に似た コは『ヘプタブルス』の中で主張している――限りでは、人間は、できる限り、可能的な小宇宙から現実的な小宇の可能性を現実性へと、変えていくことを意味している。なぜなら神が万物を「現実的に」含んでいる――とピー "energeia"(現実態)の概念を——多分パドヴァのアリストテレス学派の影響から——導入し、「人間はあらゆる種 実的な」小宇宙と見るのがフィチーノの立場であるとすれば、ピーコはアリストテレスの"dynamis"(可能態)と 小宇宙なのである。すでに見たように「人間はつねにすべての被造物を保持している」と考えることで人間を「現 とを実現したのであれば、神と一つになることもできるであろうから。そしてこのことが ピーコ にとっての、「神 宙へと、可能性を現実化していけばいくほど、神へと近づき、そしてもし仮に、その可能性を完全に現実化するこ 中心へと引きこもる」ということは、人間が「可能的な小宇宙」から「現実的な小宇宙」へと、小宇宙であること になって……」という文章から 明らかである。なぜなら、「いかなる被造物の状態にも 満足しない」ということは ということが「人間が神の似像である」ということの「あかし」になっていることである。このことは引用文中の 立場をとったのである。そしてここで、さらに注意すべきことは、ピーコにとって「人間が可能的な小宇宙である」 類の被造物の種子ないし芽をもっている」と考えることによって、あらかじめの人間を「可能的な」小宇宙と見る おいて「小宇宙」である。そしてそのもっているものが「種子」ないし「芽」であるがゆえに人間は「可能的な」 本性をもつことになる。人間は、あらかじめ「あらゆる種類の被造物の」種子ないし生命の芽をもっている限りに の似像としての人間」という考え方の中に含まれる「超越的な意味」なのである。もう一つの「内在的な意味」の し、このことが、とりもなおさず「人間が可能的な小宇宙である」ことであったのだから。そして「自らの一性の 意志に従って、そのいずれかの種子ないし芽を選び、これを育てることによって何ものかになる、あるいは自分の 「いかなる被造物の種子も選ばずに、あらゆる種類の被造物の種子をそのままに保持している」ということを意味 「もし、いかなる被像物の状態にも満足せずに、自らの一性の中心へと引きこもるならば、その人の霊は神と一つ つまり、 人間はあらかじめ、あらゆる種類の被造物の「種子」と「生命の芽」をもっており、そして自分の自 81

仕方で人間よりも下位の世界を支配するということであり、このことについてピーコは 『演説』の他の箇所で、次

受けるのであれば、われわれは、座天使のしっかりとした堅固さによって強化されるだろう。」(い) 「……もしわれわれが現実の活動的な生活に専念しながら、われわれよりも下位のものどもの世話を熱考して引き

その系列の中間に、つまり上からも下からも三番目になる中間に、位置する人間の霊魂を、「きずな」「結び目」と 体といったような連続した「事物の系列」(series, ordo rerum)としてとらえている(だからこそフィチーノは, また、ピーコとフィチーノとの異なりは明らかである。なぜなら、フィチーノは宇宙を、神、天使、霊魂、質、物 三世界からなる階層的世界を超越した、宇宙の外に存在するものとして、とらえていることを意味する。ここでも で「孤独な暗闇の中にいる」と言い表し、万物を超えた神の超越性を主張している。このことは、ピーコが神を、(エン) に充分教育されて、降りて来ることができるだろう。」 いるところの神とはいったい、いかなるものであろうか。ピーコは神を偽ディオニュシウス・アレオパギタの言葉 「われわれは第一に、このもの〔智天使〕をこそ見ならうべきであり、……そうすれば実際的な活動の任務のため ところで、人間が、可能的な小宇宙であることで、神に似ていると言われるのであるならば、人間がそれに似て

うに主張している――としたら、いったいどこを意味しているのであろうか。残念ながら、この問いに対する直接 置いたのである。しかし、世界の中央とは、それが縦の階層的秩序の真ん中でない――とピーコは、すでに見たよ になった、という理由と一致している。神は人間を「宇宙の観照者」(universi contemplator) として世界の中央に 美を愛し、その偉大さに感嘆する或るもの」が存在することを欲して神は人間の創造について思いをめぐらすこと この理由は明らかに、神が人間を創造しようとした最初の理由、つまり「かくも大いなる御業の意味を考え、 の中にあるすべてのものを人間がそこから容易に見回すことができるために、そうしたのだ、と述べられている。 それでは二つ目の、神が人間に世界の中央の場所を割り当てた理由については、どうか。これについては、 世界

呼び、「人間の尊厳」の根拠とすることができた)からである。

82 という言い方は、ピーコがプトレマイオスのように宇宙を球の重なりとして見ていることを暗示しているように思 的な答えと思われる記述は『演説』のなかにはない。ただし推測するに、「エーテル的な諸天球」(aetherei globi) われる。もしそうだとすれば、「世界の中央」とは、これらの球の重なりの中心ということになる。その中心には、

プトレマイオスの宇宙体系では、地球が位置するのであるが……。

熱心に求め、そして(望むのならわれわれにはできるのだから)その至高なるものへと到遠するよう全力を尽くし ばならないということをわれわれが理解するべきためにである。さあ、凡庸なものに満足せずに、至髙なるものを 予言者アサフの『あなたがたはみな天使であり、いと髙きお方の息子たちである』という言葉が発せられるように、 そのことを認識せずに、野獣や駄獣のようになってしまった、とわれわれに向かって言われないようにし、むしろ 理由について説明する。すなわち「それは、われわれ人間が、望むところのものになることができるという条件に めに、救いをもたらす何かとするかわりに、罪をもたらす何かとしてしまわないように、ことさらに配慮しなけれ また御父のこの上なく寛大な御慈悲を誤用して、御父がわれわれに与えて下さった選択の自由をわれわれ自身のた 生まれてきたからには、次のことを理解するべきためにである。つまり、特権的な地位で生まれたにもかかわらず、 のようなものとして造り、そのような場所に置いた理由を論じた後で、今度は、こういったことを自分が強調する このようにしてピーコは、人間の、不定なる本性と世界の中央という場所について述べ、そして神が人間を、

誤用して、野獣や駄獣のようなものとなって罪に汚れてはならず、むしろ「聖なる野心」を自分の中に吹き込んで、 至髙の神へと到達するように努力すべきだ、という――先の引用文ですでに暗示されていた――ことをピーコは言 つまり、選択の自由をもち、望むところのものになることのできる人間は、神から与えられたこの選択の自由を

て進むために、われわれの中に『或る聖なる野心』を吹き込もうではないか。」

越的なものであったがゆえに、なお一層そう問いたくなる。だが、ここではそう問うだけにとどめて、まずはピー は言っても、果たして人間は神へと到達することができるのだろうか。ピーコにとって神は宇宙の外に存在する超 最善の選択をして、神へと到達しようと努力することにピーコにとっての「人間の尊厳」は存する。 っに、人間は神へと到達するためにどのように努力すればよいのか、と聞かなければならない。 由意志により自ら望むものになることができるということにではなく、むしろ、そのような人間が自由意志により いたいのである。そして、ここに真の意味での「人間の尊厳」は存する。つまり、人間が可能的な小宇宙として自 しかし、そう

第三天(超天界)へ髙められたと『聖書』に記されている使徒パウロが引き合いに出される。 とによって神へと到達することができる、と言う。そして、智天使の生のあり方を知るために、 それに答えてピーコは、神性に最も近い天使たちの、特に智天使の生を模範として人間が生きようと努力するこ 智天使たちがいる

う。」 (8) Sel然哲学(naturalis philosophia)の光りで満たし、こうして最後に神的な事物の知識によって魂を完成させよを自然哲学(naturalis philosophia)の光りで満たし、こうして最後に神的な事物の知識によって魂を完成させよ (moralis scientia) によって情念の衝動を抑制し、弁証論 (dialectica) によって理性の暗闇を追い払い、そして、言 いように、また理性が決して不注意から発狂しないようにしよう。次いでわれわれは、よく整えられ浄化された魂 わば無知と悪徳の汚れを洗い落とすことによって、われわれの魂を浄化し、こうして情念がいたずらに荒れ狂わな ていた、と答えるだろう。それゆえ、われわれもまた、地上において、智天使たちの生き方 を見 なら い、道徳学 「彼(パウロ)は、ディオニュシウスの解釈に従えば、智天使たちが浄化され、照明され、そして最後に完成され

として、順に弁証論、自然哲学、そして神学を最上位とする序列を作っている。これらの学問が別の所で「自由学 階として説明されている。これらの学問はピーコにとって明らかに、世界がそうであったように、道徳学を最下位 て「完成」させることを意味する。神へと到達しようとする人間の努力は具体的に、諸学問による魂の発展の三段 証論によって「浄化」し、次に自然哲学の知識で「照明」し、最後に神的な事物についての知識である神学によっ 智天使たちの「浄化」「照明」「完成」という生のあり方は、 地上の人間にとっては自分の魂を、 まず道徳学と弁

成における学問ないし哲学の効用を強調したことは、注目に値する。 ** ! (2) ** 人間形成に役立つとして彼らが尊重していた学問が単なる衒学に、堕落していく状況の中で、ピーコが再び人間形 フィレンツェにおいて、人文主義が初めの理想を忘れ、人文主義者たちが重視していた修辞学が単なる美文愛好に、 の点では、ピーコは人文主義の伝統を継承している、と見なしてよいだろう。そして、一五世紀も末になり、特に うに学問が人間形成に役立つとして、これを尊重する立場はルネサンス期の人文主義に共通のものであるから、こ 芸」(liberales artes) と、また道徳学と弁証論とを一つにまとめた上で「三部門の哲学」と呼ばれている。

sive rationaria, 弁証論、あるいはわれわれの言葉では論理学)を学び、それについての知識を充分に身につけ、そ となって、この自然の中にあらわれている、というピーコの考えによる。この考えから、自然哲学の絶対的な完成(83) のの、また自然全体の本質を知ることを経て、最後に、梯子の、神が座している天辺へとたどりつき、 という比喩である。この比喩的に「梯子」と呼ばれている――ピーコ自身は「自然全体」と考える――ものの一段 その天辺に主がおられる。そして観照者である天使〔智天使〕たちがそれを伝って、交互に上がり下りしている としての「自然魔術」(naturalis magia) をピーコは称賛する。彼によれば、自然魔術とは「極めて深い神秘に満ち 次ぐ地位を与えられている。これは「神の不可視なものども」(invisibilia Dei)が「可視的な印」(visibilia signa) 福で満たされる、とピーコは言うのである。彼にとっては自然哲学が道徳哲学や弁証論よりも上位にあって神学に うして「梯子」(自然全体) の一段一段を 伝って 哲学し、分析的方法と総合的方法を用い、自然的な事物のおのお にわれわれは、その梯子を一段一段正しく上がっていくために、「議論の術ないしは 推論の術」(ars sermocinalis と言われる魂の感覚的な部分全体)を道徳哲学(moralis philosophia)によって 清めなければならない。そして次 前にわれわれはまず、魂の「手と足」(魂の首筋をねじふせて魂をおさえつけている肉体の誘惑が座を占めている、 されることになる。つまり「最も低い地面から最も高い天上へとのびる、数多くの段の連続からなる梯子があって、 一段を伝って、梯子の天辺に座している神へと到達しようとするわけである。だがしかし、この「梯子」に触れる この哲学の効用は、さらに『創世記』第二八章一二~一三節の「ヤコブの梯子」の比喩についての解釈から確認 学による魂の平和の実現に他ならない。

と進む中で、神へと到達しようとする人間の努力において哲学が役に立つということを確認してきたわけだが、今

キリスト教の範囲内で、新しいものから古いものへと、つまりパウロか

5

・コブ、

に自然の言葉に耳を傾け、そしてすぐにその自然に命令し、それを、よく仕える侍女に変えてしまう能動的な活動 ながら、驚嘆すべき業を行うよりも、むしろ、この業を行う自然に熱心に仕える」術なのである。ここには、ピーて散布され、この世界に種まかれた『もろもろの力』の中から或る力を、言わば隠れた場から光の中へと呼び出し ブが引き合いに出される。 として、考える態度から見て、彼が、魔術的・錬金術的な教えに、どれだけ多くを負うていたかが、 ないか、と考えたくなる。そしてベーコンの方はと言えば、「科学を、力として、つまり、 たとえピーコが自然魔術を称賛しているとは言え、やはり両者に共通のルネサンス的な思想の土壌があったのでは ており、 コの一世紀後に世に出てくるガリレオ・ガリレイやフランシス・ペーコンを彷彿させる ものが ある。 「自然は神の命令の忠実な執行者として神の言葉に由来している」と主張し、自然哲学の重要性を強調するとき、 これまで智天使の生のあり方に範を見てきたピーコは、次に智天使の生の目的について説明する。ここでは、 最も秘儀的なものどもの最も深遠な観照を、そして全自然の認識を、獲得しており、……神の惠みによっ 自然の主人となるため わかる。」 ガリレオが 3

読む「神は髙き所で平和をつくりだす』という言葉に従って『それは平和である』と答えるだろう。」 経た後の、自然哲学の主人としての「最も聖なる神学」(sanctissima theologia)である。それは言い替えれば、哲 われ人間も、平和を実現させなければならない。このことにおいても、やはり自由学芸ないし三部門の哲学が役に 〔智天使〕どもに対して、特に何を望んでおられるのか』と尋ねてみよう。 「自身が生まれる以前に生命の契約を神と結んだ義人ョブに『至髙の神は、 智天使たちの生の目的は平和なのである。それゆえ、この地上において智天使の生を見ならおうとしているわれ **真に静かで揺るぎない平和を実現できるのは、道徳哲学から、弁証論、** 御自身に付き従っている数 ョブは、『ョブ記』の中に われわれが 百 b

٧'n

近い、と信じられていた。そして、このように単にキリスト教ばかりでなく、さらに異教的な思想をも引き合いにから古いものへの――ルネサンス期にそう考えられていた――順番である。当時においては、古いものほど真理に 出すというピーコの姿勢の背後には、思想内容における内的な深い一致についての確信があった。この確信を『九 にペルシアのゾロアスターの教義によって「哲学の効用」が確認されていく。これらの教義の配列は、新しいもの 後は、異教によって、つまりギリシア人の密儀、デルフォイ神殿の三つの戒め、ピュタゴラスの教え、そして最後 度は、 (器)セこそ、ユダヤ教の神秘主義思想であり、そしてピーコが非常に重要視したカバラと大いに関係がある――とピー コの時代には考えられていた――からである。このモーセの律法を引き合いとして「哲学の効用」が語られてから キリスト教から異教への扉を開こうとする。その仲介役を果たすのはモーセに他ならない。なぜなら、モー

Ξ

○○の提題』をめぐる公開討論会でピーコは実証しようとしたのである。

するにとどめよう。つまり、「思想内容における内的な深い一致」という ピーコの 確信は、人間を「神の似像」と して「可能的な小宇宙」・「世界の中心」と見る彼の立場の当然の帰結ではないのか、と。 々に対して反論し、その後、『提題』の内容の説明に移っていく。この部分に ついては、ただ次の ことだけを主張 『演説』の最後にピーコは『九〇〇の提題』に関する部分を設け、ここで、彼が企てた討論会を非難していた人

結び

これまで『演説』に則してピーコの思想を見てきたわれわれは、いまや、 われわれの結論を出さなければならな 神へと到達することができる、

位とする「自由学芸」ないし「三部門の哲学」の系列が役に立つ。これらの哲学によって神に最も近いと言われる、 力することを意味する。この努力においては、道徳哲学を最下位とし、順に弁証論、自然哲学、そして神学を最上 意志によって最善の選択をし、つまり可能的な小宇宙として一性を保持することを選択し、神へと到達しようと努 ピーコにとって「人間の尊厳」とは何を意味するのか。それは、可能的な小宇宙である人間が自分の自由

超天界に存在する天使の、特に智天使の生を模範として人間は、神へと到達しようとする。

ればならない。「人間の尊厳」とはピーコにとって、神へと到達することそれ自体にあるのではなく、 を得ないこと、このことが「人間の悲惨」以外の何であろう。だから、われわれは、ここまででは、こう言わなけ(3) とすればするほど、それとの無限の距離をますます知らざるを得ない。努力の果てに神との無限の距離を知らざる だったらなれるかもしれない。しかし、神はピーコにとって超越的であるがゆえに、人間は、それへと到達しよら は、この宇宙の外に存在する超越的なものであったから。われわれ人間は、努力しだいで超天界に存在する天使に と到達することができるのであろうか、と。その答えは「できない」ではないか、と思える。なぜならピー へと到達しよりとする人間の努力にこそある、と。そしてまた、この努力に、「人間の悲惨」もあった。)かし、次に、われわれはここでもう一度問わなければならない、果たして人間は、そのような努力をして神へ

的な努力を通じて超天界に至り、その後、神の恩寵の助けによって神の座へと引き上げられる。しかし、そもそも らない。超天界の天使から至高の神への、言わば「飛躍」は、もしそれが可能だとするならば、神の恩寵の助けに よる以外にないのではないか、と考えるわけである。つまり、人間は自分の自由意志による最善の選択をし、 いるのであろうか。われわれはここで、すでに触れていた「神による恩寵の助け」という考え方を思い出さねばな 人間が自分の自由意志に従って母善の選択をする時点から、恩寵の助けが必要とされる、と考えることも可能であ)かし、それでは、『演説』での「人間の霊は神と一つになって」という ピーコの 力強い表現は、何を意味して そう考えた場合、 人間は「自由意志に従った哲学的な努力」と「信仰による神の恩寵の助け」との協同によ と言えるかもしれない。

大切さを繰り返し強調している**。** スコ・ピーコ宛の手紙(一四九二年)からわかる。その手紙の中でピーコは、以下に見るように、神への祈りの このようにピーコが信仰を重視していたと考えることが的はずれではないということは、 彼のジャン・フランチ

を一つに結びつける、そういった祈りへと、おまえを招いているのである。」 深奥で、心をふるわせながら神へと語りかける、そういう祈りへと、そしてまた、観照の光り輝く闇の中で、単に と招くとき、多くの言葉によってなされる祈りへと招いているのではなく、むしろ、われわれの心の奥底で、魂の が、あるようにしなさい。これらの救助策によって、あたかも二つの翼でもってのように、涙の谷間から、 を上昇させなさい。実際、神の助けなしにわれわれは何をすることができるだろうか。……私は、おまえを祈りへ 「そして、何をおいても、おまえのもとにいつも、この世と悪魔に対する二つの救助策が、すなわち施しと祈りと おまえ

である。 (32) 紀もたてば、同じイタリアにおいてガリレオが教会による断罪の中で、ピーコよりも明確に行おうとする試みなの Concordiae)という彼の呼び名に相応しく、彼なりの仕方で再び調和させようとした。そして、この試みは、一世 る。つまり、一四世紀にオッカムのウイリアムが 分裂させた 哲学と神学とを ピーコは、「調和の君主」(Princeps をも重視するピーコの姿勢の背後には、哲学(理性)と神学(信仰)の 関係についての 伝統的な 問題が 潜んでい どに、敬虔さに満ちたものになっている。このように神への祈りを、そしてまた、すでに見たように哲学的な努力 この手紙は、これをわれわれが読むとき、書いた人物が哲学者ではなく、修道僧ではないか、と疑ってしまうほ

ä

1 この「はじめに」全体については以下の諸著作を参考にした。P.O.Kristeller, Renaissance Thaught and Its Sources (Roma-Bari, 1964), pp.94-132に詳しく論じられている。佐藤三夫著『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』(有 (New York, 1979), pp.169-181. 特に一五世紀末のフィレンツェの状況については、E.Garin, L'umanesimo italiano

- 二一六一二二九頁。 儒堂髙文社、一九八一年)、九六─一○二頁。近藤恒一著『ルネサンス論の試み』(創文社、一九八五年) 三五─七九頁、
- 2 対する批判は、P.O. Kristeller, op. cit, p. 176. 一部の研究者とは、A. Dulles のこと。A. Dulles, Princeps Concordiae (Cambridge, Mass, 1941), pp. 15-16. これに
- Randall Jr. (eds), The Renaissance Philosophy of Man (Chicago, 1948) 及び、大出哲・他訳(国文社、一九八五年) を参考にさせていただいた。 G. Pico della Mirandola, De hominis dignitate, Heptaplus, De ente et uno e scriti vari, a cura di E. Garin (Firenze, 1942), p.104. はお訳をする際には、E.L.Forbes, pp.223-254, in E. Cassirer, P.O. Kristeller and J.H.
- (4)' (5) Ibid.
- (ω) Marsillo Ficino, Theologia Platonica, cf. P.O. Kristeller, The Philosophy of Marsilio Ficino, tr. into English by V. Conant (New York, 1943), pp. 97-120. 佐藤三夫著、前掲街、一〇三—一〇五頁参照。
- 7 ながらも、他の箇所では(Ibid., p. 300) 人間を「三つの世界の複合及び結合」あるいは「天上的なものと地上的なものと の結び目及びきずな」と彼は呼んでいる。 Cf. G. di Napoli, Pico della Mirandola e la problematica dottrinale del 界の結び目・きずな」と呼んでいる(G. Pico, op.cit., p. 463, p. 478)。 また『ヘブタブルス』の或る箇所では(Ibid., p. suo tempo (Roma, 1965), p. 375, 192)人間を第四の世界として、三つの世界(超世界的世界・天界・月下の世界)からなる 階層的宇宙の 外部に位置づけ ピーコは『愛の歌についての注釈』の中ではフィチーノに従って、人間の理性的霊魂を全被造物の中間に位置づけ「世
- (∞) G. Pico, op. cit., p. 106.
- (5) C. Trinkaus, Renaissance idea of the dignity of man, in Dictionary of the History of Ideas (New York, 1973),
- (2) Cf. P.O. Kristeller, Renaissance Thought and Its Sources, p. 175.
- (二) G. Pico, op. cit, p. 106.
- (12) 佐藤三夫著「ピーコ・デッラ・ミランドラ」上智大学中世研究所編『ルネサンスの教育思想(上)』(一九八五年)所収' 二四一一二四二頁、二五四頁参照。
- (A) G. Pico, op. cit., p. 302.
- (4) Ibid., p. 110.

- (5) *Ibid.*, p. 112
- ピーコは『ヘプタプルス』の中(Ibid., p. 412)でも、神の超越性を強調している。
-) *Ibid.*, p. 110.
- ጃ) *Ibid.*, pp.112–114. ፰) *Ibid.*, p.122, p.124
- 注(1)の Garin の著作を参照のこと。

20

- (전) G. Pico, op. cit., p. 114. (전) *Ibid.*, p. 116.
-) Ibid., p. 152.

23

Ibid., pp. 122-124.

- 25 Opere 5, p. 316, in Le Opere di Galileo Galilei, Ed. Barbèra (Firenze, 1968) E. Garin, Medioevo e Rinascimento (Roma-Bari, 1973), p. 143.
-) G. Pico, op. cit, p. 116.
- 一九八四年)、一六—一七頁、三七—四五頁参照。 F.A. Yates, The Occult Philosophy in the Elizabethan Age, 1979. 邦題『魔術的ルネサンス』内藤健二訳(昌文社、 F.A. Yates, Giordano Bruno and the Hermetic Tradition, 1964. 邦題「ヘルメス・トリスメギストス」現代思想
- 30 波擗座哲学、哲学の歴史Ⅱ(野田又夫編、一九六九年)所収、一七頁参照のこと。 この「人間の悲惨」を「人間存在の豊かさ」と結びつける考え方については、潜水純一箸「ルネサンスの哲学(一)」岩 「特集=ルネサンスの閣と光」(冑土社、一九七七年)所収、二二○頁参照。
- 31 Prostatori Latini del Quattrocento, a cura di E. Garin (Mirano-Napoli, 1952), p. 830
- ——一七頁参照。 |拙著「ガリレオ裁判についての一考察――ガリレオにおける聖と俗」法政大学大学院紀要第二〇号(一九八八年)所収、

あとがき

導に感謝の意を表します。先生の御指導なくしては、今日の私のルネサンス研究はありえなかったでしょうから。 の意を表します。そして最後に、今年度で法政大学文学部哲学科を退職なされる加来彰俊先生の永年にわたる御指 この場をお借りして、ルネサンス研究に御理解を示し、この紀要への執筆を勧めて下さった村上恭一先生に感謝